

児童生徒一人一人が今、主体的に活動できる授業づくり — 観点別評価の取り組みを通して —

中村くみ子・昆亮仁・山口美栄子・高橋幸・伊藤慎悟・阿部大樹*, 上濱龍也**

*岩手大学教育学部附属特別支援学校, **岩手大学教育学部

(令和2年3月4日受理)

1 はじめに

平成26年度から「今」という視点に注目し、「今」の主体的な生活の積み重ねが将来の主体的な生活の実現につながると考え、「児童生徒一人一人が今、主体的に活動できる授業づくり」を研究主題に掲げ、全校で授業づくりに取り組むこととした。平成26～27年度は『授業づくりの視点』に基づく全校での実践を通して、平成28～29年度は、「個に応じた適切な目標と支援を目指して」を副題に掲げ取り組んできた。そして、平成30年度～令和元年度は、「観点別評価の取り組みを通して」を副題に、観点別評価を生かし児童生徒の「主体的に活動する姿」を目指した授業づくりの深化を図ることとした。

2 これまでの研究を受けて

学校教育目標の実現を目指し、全校で一貫した授業づくりを継続していくためには、児童生徒の「主体的に活動する姿」について共通理解を図りながら、「授業づくりの視点」に基づいた授業実践を重ねていく必要がある。また、児童生徒がより主体的に活動できるように児童生徒の力の質を高めていきたい。そして、その力を次の単元や他の学習場面においても発揮するためには教師がその力をより多面的に捉えることが不可欠である。

これらのことから本次研究は、副題を「観点別評価の取り組みを通して」とし、観点別評価により児童生徒が発揮した力を多面的に捉え、その質を高められるような「主体的に活動できる」授業づくりに迫るものである。

3 研究の目的

観点別評価を生かし、児童生徒の「主体的に活動

する姿」を目指した授業づくりの深化を図る。

4 研究の内容と方法

- ・授業実践
- ・「主体的に活動する姿」の観点別評価

5 研究の実際

(1) 授業実践

「授業づくりの視点」に基づいた授業づくり及び、「授業づくりの構想」のPDCAサイクルで授業改善を行うことを全校で確認し、授業実践を重ねることとした。

小学部は「遊びの指導」と「生活単元学習」、中学部と高等部は「作業学習」を取り上げて取り組むこととした。

(2) 「観点別評価シート」の作成

1年次は、児童生徒の「主体的に活動する姿」の活動に即した具体的な評価が、新学習指導要領で示された「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で整理できることを全校研究での演習を通し確認できた。このことから、観点別に目標を立てるのではなく、児童生徒が「主体的に活動する姿」を目標にするとともに、児童生徒が発揮した力を多面的に捉えられるように「評価シート」を「観点別評価シート」に改めた。取り組みとしては、図1に示す手順で「観点別評価シート」を作成し、単元ごとの評価を積み重ねていき、1学期の個別の指導計画の目標に対応した評価を3観点で行うことで個別の指導計画との関連付けを図りたいと考えた。

この「観点別評価シート」の取り組みを進める中で、それぞれの学部の実態に合わない部分が明らか

になったことから、実態に合わせた様式の修正を行った。

6 1年次の成果と課題

(1) 成果

- ・児童生徒がどのような力を発揮しているのかを具体的・分析的に捉えることができた。
- ・児童生徒の学習状況や、より実態に即した目標設定と支援の在り方、単元づくり、授業づくりを意識することができた。
- ・「観点別評価シート」をツールとして児童生徒の姿を共有する場を設定できた。

(2) 課題

- ・学校全体で目指す「主体的に活動する姿」と児童生徒個々の「主体的に活動する姿」について確認する必要がある。
- ・学習評価の進め方が明確でなかった。評価の時期や手順を検討、確認する必要がある。
- ・「観点別評価シート」を作成していく中で、年間指導計画で設定した期待する姿（単元目標）と前単元の学習評価から設定する個別の単元目標のつながりにずれが生じることがあった。児童生徒の実態に即したより主体的な取り組みにつながる年間指導計画になるよう見直しを図る必要がある。

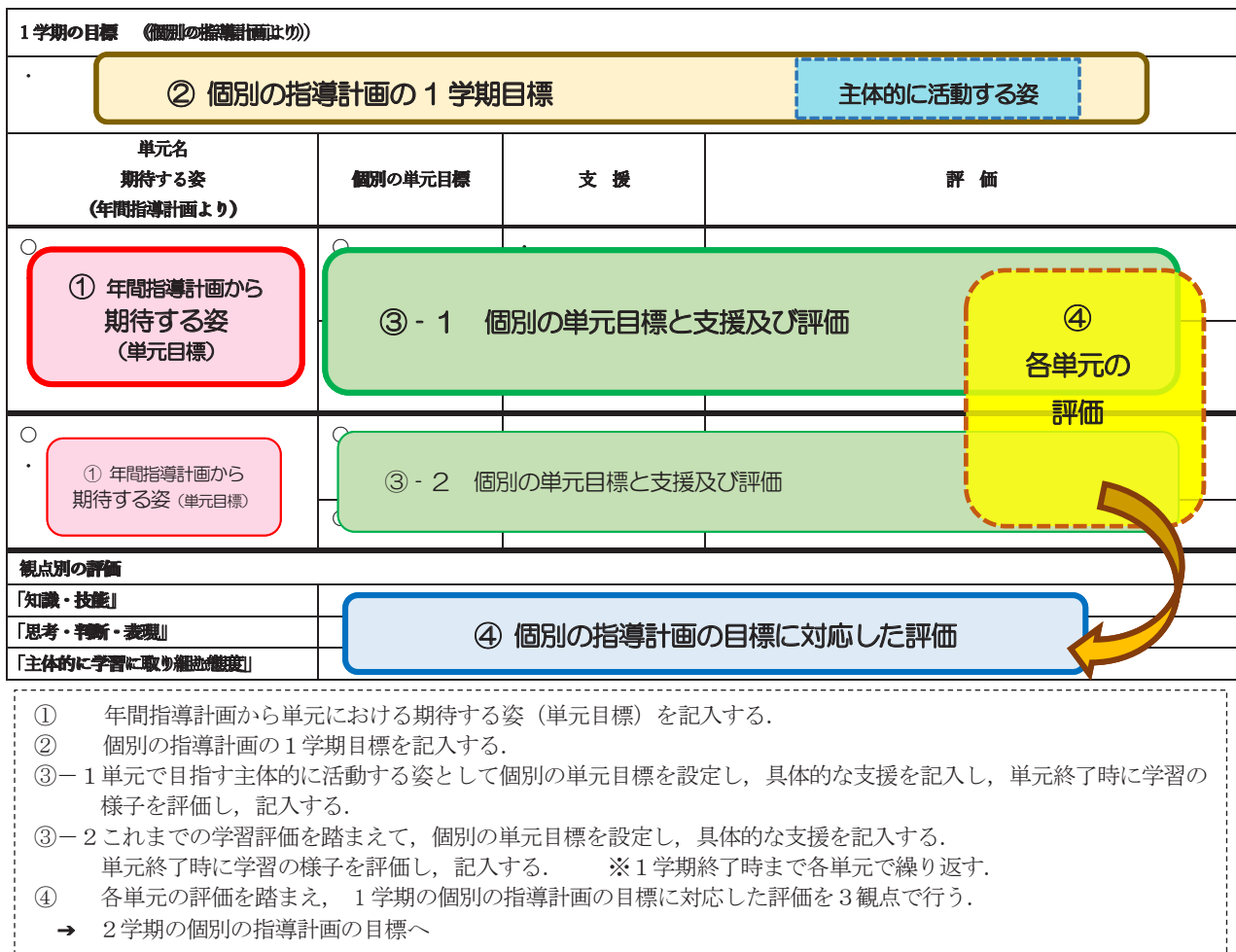


図1 「観点別評価シート」の共通様式

7 2年次の取り組み

1年次の取り組みを受け、本校が目指す授業づくりに迫るために次のことに取り組んだ。

(1) 「主体的に活動する姿」の共有

①全校研究会において本校が目指す「主体的に活動する姿」は学校教育目標から学部目標、単元目標、日々の授業の目標につながっており、一貫性と連続性があることを「授業づくりの構想」と併せて確認した。

②前単元の学習評価から設定した単元目標や日々の授業の目標は、児童生徒個々の実態に即した目標であり、「主体的に活動する姿」であることを授業者間で確認、共有した。また、図2に示したように「観点別評価シート」の個別の単元目標を踏まえることで目標が具体的となり、より実態に即した（本時の）個人の目標が設定されるようにした。

③授業研究会では「観点別評価シート」を活用し、前単元までの評価を踏まえた目標設定について、下線を引いたり、文字の色を変えたりして検討した。また、このように前単元までの学習の様子（評価）を共有することで、児童生徒の「主体的に活動する姿」の具体的なイメージをもてるようにした。

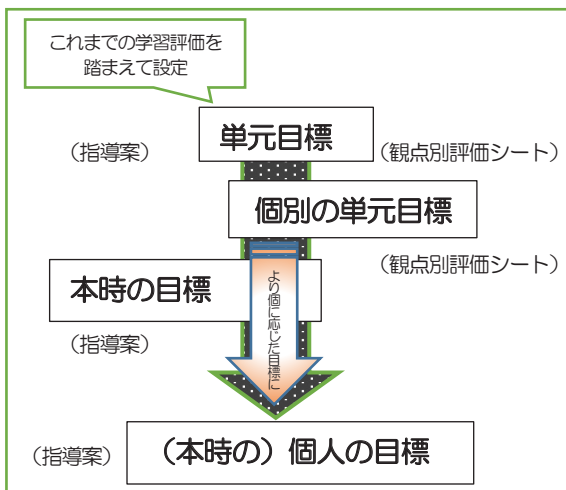


図2 目標のつながり

(2) 客観性のある評価にするために

検討、見直しを図った学習評価の時期や手順で児童生徒の「主体的に活動する姿」を観点別評価する

こととした。複数の教師で児童生徒の姿を多面的に評価することが客観性をもたせると考え、必ず複数で評価をすることとした。

(3) 見直しを図った教育課程に基づいた実践

見直しを図った教育課程に基づいて、「観点別評価シート」を活用しながら、授業実践を積み重ねることを全校研究会で確認した。全校授業研究会を表1のとおり実施した。

表1 全校授業研究会(2年次) 授業一覧

	学習グループ：単元名
小学部	たんぼぼ組(1・2年) 遊びの指導 みんなでゴーゴー! わくわくひろば
中学部	石けん班 作業学習 作業Ⅲ：肴町商店街で販売しよう① ～みんなで石けん150本を作ろう～
高等部	手織り班 作業学習 織り物製品を製作しよう ～7月ガンフ工房販売会で販売しよう～

(4) 学校公開研究会を受けて

令和元年9月28日に行われた学校公開研究会において、分科会等で話題になったことを受け、以下のことを全校研究会で確認した。

①評価基準について

評価規準を設定すれば評価基準も必要となる。そうなれば教師が「仕向ける」「させる」ような授業づくりになり、児童生徒が「主体的に活動する姿」から離れていくのではないかと考える。また、児童生徒の日々変化する姿を受け止め、その状態に応じて、弾力的に授業を行っているため、規準化することが難しい。以上のことから、本校では評価規準を設けずに授業を行ってきたことを再確認した。

②指導と評価の一体化について

児童生徒の「主体的に活動する姿」を目標に掲げ、3観点で評価していることから指導と評価が一体ではないという指摘があった。これを受け、本校の観点別評価は、「主体的に活動する姿」を目標とし、授業で見られた「自分の力を発揮して活動する姿」すなわち「主体的に活動する姿」を見取り、それを3観点で整理する

ものである。2段構えの評価となっており、指導と評価は一体になっていることを確認した。(図3)

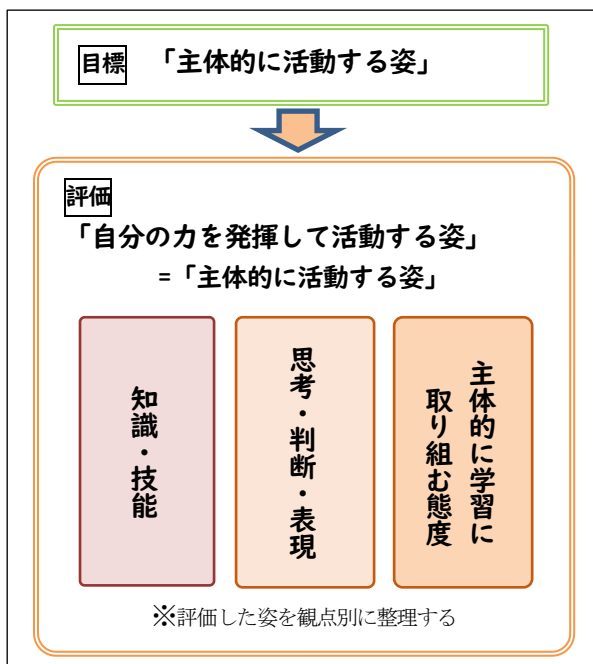


図3 本校の観点別評価

(5) 各学部の取り組みの実践

①小学部の実践

小学部では「遊びの指導」と「生活単元学習」を取り上げて観点別評価に取り組んだ。特に生活単元学習においては、活動内容が多岐に渡ることから単元ごとに評価できるように観点別評価シートの様式の見直しを図った。また、学習評価を次の単元づくりに生かせるよう年間指導計画を立てる段階で評価の時期を設定し、学級単元の単元期間も学部全体で揃えるようにした。併せて、年間指導計画で設定した単元目標（期待する姿）と前単元の評価を踏まえて設定した単元目標にずれが生じることがあり、随時年間指導計画の単元目標（期待する姿）を修正してきた。また、評価方法として日々の授業の中で見られた児童の「主体的に活動する姿」を付箋に記録し、単元終了後にそれらを持ち寄って授業者間で児童の姿について話し合い、観点別に整理した。

これらの取り組みから、観点別評価シートを活用した評価の流れが構築され、「主体的に活動する姿」について授業者間で話し合うことで学習評

価に客観性をもたせることができ、また授業者間で児童の姿を共有するなど深い児童理解につながった。また、学習評価を具体的な目標設定や支援に生かすことができ、授業づくりの深化が図られた。

その一方で「観点別評価シート」の様式について、単元ごとに観点別の評価の欄を設けたことで評価しやすくなったものの個別の指導計画に反映しにくいという実態もあった。そこで次年度に向けて、生活単元学習の単元の整理を行い、「観点別評価シート」の様式について検討を行った。個別の指導計画等に反映しやすいように、3観点を含み端的な文章で評価を記載する様式に変更することとした。

②中学部の実践

中学部では、作業学習1単元に1枚の「作業ノート」を作成し、保護者との情報共有のツールとして活用している。この「作業ノート」は、前単元までの学習の様子を基に単元目標を設定し、有効な支援や学習の様子を記録したものである。「観点別評価シート」と「作業ノート」の記載内容が重複することから、作成の意義や手順を検討、整理した。それにより、「作業ノート」は単元の評価、「観点別評価シート」は学期の評価とすることとした。「作業ノート」を作成し、生徒の「主体的に活動する姿」を授業者間で共有し、「観点別評価シート」に転記した。そして単元ごとの学習の様子をさら3観点を整理し記載した。1学期末に観点別に総評し、個別の指導計画の1学期評価につながるようにした。

これらの取り組みから、生徒の学習の様子を授業者間で意見交換しながら観点別に整理することで多面的に生徒の姿を捉えることができ、深い生徒理解につながった。そして、授業者間で評価することで、生徒が主体的に活動できる単元計画になるよう協議したり、次の単元目標を検討することで支援の有効性が確認したりできたという授業づくりの深化が図られた。

「作業ノート」は単元改善に即時性があり、「観

点別評価シート」は複数の単元をまとめることができ、学期のまとめとして有効だった。しかし、整理されたとは言え、まだ煩雑さがあった。そこで、次年度に向けて、この両者の長所を生かしながらスムーズに学習評価できるように「作業ノート」に「観点別評価シート」のまとめに当たる欄を設けるなどして様式の統合や見直しを図ることとした。

③高等部の実践

高等部の作業学習の単元期間は約3か月あり、1学期と2学期をまたぐ単元があるため、1単元ごとに観点別評価シートを作成した。また、高等部では週ごとを基本とし筆記や写真、動画などで生徒の活動の様子や有効だった支援、仲間や教師との関わりなどについての「作業学習の記録」をまとめている。これを基に授業者間で打ち合わせを行ったり、支援の検討や授業改善を行ったりしている。この「作業学習の記録」は前次研究から継続して取り組んでいるが、日々の実践や記録を継続して取り組む中で、3観点による評価の記載が自然に見られるようになってきた。これは生徒の「主体的に活動する姿」を3観点によって授業の中で評価していると言える。そして、この「作業学習の記録」を基に「観点別評価シート」を作成し、授業者間で見合い多面的に、客観的に学習評価を行ってきた。また、学部研究会において、評価した生徒の「主体的に活動する姿」を教師間で共有し、生徒理解にも役立てた。

これらの取り組みから、生徒を多面的に見取ることができ、より深い生徒理解につながった。また、授業者間で評価することで客観性をもたせ、分析的な学習評価を行うことができ、それが授業の評価及び指導の評価につながり、授業改善を行うことができたことで授業づくりの深化が図られた。

高等部では、「観点別評価シート」に記載された生徒の「主体的に活動する姿」を共有するだけでなく、他の学習場面でもそのような姿が見られたかについて話題にしてきた。今後は、個別の指導

計画や指導要録の記録等から、他の学習場面でも生徒が自分の力を発揮しているのかを検証していく。また、年間指導計画や個別の指導計画の見直しや修正を随時行い、「主体的に活動できる授業づくり」の深化を図っていくことを確認した。

(6) 「主体的に活動する姿」の連続性

観点別評価により、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」として見取り整理してきた児童生徒の具体的な「主体的に活動する姿」を並べて確認することで、小学部「遊びの指導」と「生活単元学習」、小学部「生活単元学習」と中学部「作業学習」、中学部「作業学習」と高等部「作業学習」につながりや関連性のある姿が多く見られた。そして、それらの姿は各学部目標で示された姿でもあった。これにより、学部間の連続性が明らかになった。

表2は、小学部「生活単元学習」と中学部「作業学習」で見られた連続性のある姿、または関連する姿の一部をまとめたものである。

表2 「生活単元学習」と中学部「作業学習」の連続性

	小学部: 生活単元学習	中学部: 作業学習
「知識・技能」	○活動内容や役割が分かる。 ○やり方や手順が分かる。 ○学習に必要な要素を獲得している。	○手順ややり方が分かる。 ○道具・用具の使い方が分かる。 ○作業のペース配分ができる。 ○完成形や仕上がりがどうあれば良いかが分かる。
「思考・判断・表現」	○支援を活用する。 ○考える。 ○見比べる。 ○判断する。 ○相手を意識する。 ○まねる。 ○見比べる。 ○考える。 ○判断する。	○支援を活用して、または支援を受けて、次の手順や活動を確認したり、適切な量や数を判断したりする。 ○見本を見たり、友達の様子を見たりして、自分は何をどうするのか、考え、調整する。
「主体的に学習に取り組む態度」	○見通しをもって取り組む。 ○意欲的に、真剣に取り組む。 ○意欲的に、真剣に取り組む。 ○係や役割に取り組む。 ○達成感や満足感を味わう。	○目標数や仕上がりを意識して意欲的に取り組む。 ○笑顔や声の大きさを意識して、販売活動に取り組む。

8 研究のまとめ

(1) 成果

観点別評価を生かし、児童生徒の「主体的に活動する姿」を目指した授業づくりの深化を図ることができた。

○ 学習評価システムの明確化

評価方法や評価時期などが明確になった。また、評価した「主体的に活動する姿」を3観点に整理することが全校で確認された。

○ より個に応じた目標設定

観点別評価による分析的評価により、児童生徒の実態をより深く理解できた。そのため、より個に応じた目標の設定や支援の在りについて検討することができた。

○ 共通認識をもった授業づくり

授業者間で評価することで、児童生徒の実態や設定された目標、有効な支援などについて共有しながら授業づくりを行うことができた。

○ 学部間の連続性

観点別評価を通して学部間の連続性が確認された。児童生徒が実態に即した学習活動であり、かつ、生活年齢に見合った学習活動に主体的に取り組んでいることが明らかになった。

(2) 課題

○ カリキュラム・マネジメント

年間指導計画等について学習評価を生かしながら年度末に限ることなく随時、見直しを図ることが必要である。

○ より実用性のある学習評価へ

個別の指導計画等への関連付けを図るために評価方法や様式の検討を今後も継続して行う。

9 研究を振り返って

本研究を通して「主体的に活動する姿」について学部間の連続性があることが明らかになった。それは「授業づくりの構想」(図4)に示すような「主体的に活動する姿」という一貫性と児童生徒が生活年齢に見合った活動内容に取り組むための学部間の連続性のある授業づくりができたと考える。さらに、

学校教育目標の実現に向けて全校で取り組むことができたということでもある。それは、「児童生徒一人一人が今、主体的に活動できる授業づくり」を研究主題に掲げて6年間に渡り、全校で取り組み続けてきたことで具現できたことである。

今後も、本校が目指す児童生徒が「主体的に活動できる授業づくり」を継続しながら、新学習指導要領に示された資質・能力の育成を目指していきたい。

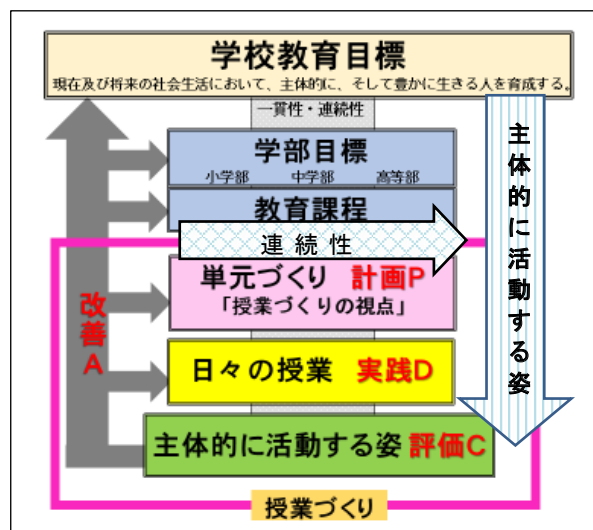


図4 授業づくりの構想

参考文献

- 1) 岩手大学教育学部附属特別支援学校 (2015) : 「研究紀要第23集」
- 2) 岩手大学教育学部附属特別支援学校 (2017) : 「研究紀要第24集」
- 3) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 (2015) : 専門研究B知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策に関する研究—特別支援学校(知的障害)の実践事例を踏まえた検討を通じて—
- 4) 名古屋恒彦著 (2018) : 豊かな生活が切り拓く新しい知的障害教育の授業づくり「アップデート!各教科等を合わせた指導」
- 5) 全日本特別支援教育研究連盟編著 (2018) : 特別支援学校新学習指導要領ポイント総整理 特別支援教育